法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-01

自閉スペクトラム症の大学生・大学院生のレジリエンスに関する研究

萩原, 豪人 / HAGIWARA, Takehito

(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
93
(発行年 / Year)
2023-03-24
(学位授与番号 / Degree Number)
32675甲第580号
(学位授与年月日 / Date of Granted)
2023-03-24
(学位名 / Degree Name)
博士(学術)
(学位授与機関 / Degree Grantor)
法政大学 (Hosei University)
(URL)
https://doi.org/10.15002/00026665

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	萩原　豪人
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	第 836 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査　教授　丹羽　郁夫
	副査　教授　末武　康弘
	副査（学外）上智大学教授　久田　満

自閉スペクトラム症の大学生・大学院生のレジリエンスに関する研究

〔１〕本論文の受理および審査の経過

萩原豪人氏は、本大学院人間社会研究科博士後期課程人間福祉専攻に 2020 年 4 月に入 学後、2020 年度は指導教授・末武康弘、2021～2022 年度は指導教授・丹羽郁夫、副指導教授末武康弘より研究指導及び博士論文作成指導を受けてきた。萩原氏は博士論文提出に必要な単位を取得しており、人間社会研究科が開催する博士論文研究発表会において構想発表と中間発表(計 3 回)を行い、また法政大学大学院紀要に論文を発表する等、博士論文提出の条件を満たしている。

2022 年 9 月 30 日に萩原氏から博士論文審査願及び学位請求論文が提出されたことを受けて、同年 10 月 5 日の人間社会研究科教授会において論文受理審査委員会（委員：末武康弘、佐藤繭美、金築優、丹羽郁夫）が設置され、同年 10 月 19 日に委員会が開かれた。いくつかの要望が出されたが、 論文の構成及び内容は審査に値すると評価され、同年 10 月 26 日人間社会研究科教授会において、論文審査の受理が承認されるとともに、主査・丹羽郁夫、副査・末武康弘、副査・久田満（上智大学総合人間科学部心理学科教授）の 3 名による論文審査小委員会が設置された。各委員が論文の査読を行った上で、2022 年 12 月 17 日に口頭試問と審査を実施し、3 名の審査委員全員が博士論文として合格に値すると判定した。

〔２〕論文の主題と構成

近年、思春期・青年期の不適応や精神的な不調に関する問題の 1 つとして注目されている自閉スペクトラム症／自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder: 以下 ASD）を抱える大学生・大学院生について、適応がよいといわれている者たちの存在が指摘されている。本論文は、その者達およびそれを取り巻く環境の特徴に関して、文献の展望、面接調査、質問紙調査、事例研究の結果を示し、それらを検討することによって、ASD 傾向のある者に

対して、幼少期からの生育環境の在り方および、適応を増進させる要因に関する議論に資する知見を提供することを目的として執筆されたものである。

論文の構成は以下のとおりである。

第１章　自閉スペクトラム症とレジリエンス
第１節　問題の所在と本研究全体の構成
第２節　ASD の概要とその研究
第３節　レジリエンス研究
第４節　ＡＳＤおよびＡＳＤ傾向のある思春期・青年期の若者のレジリエンスに関する研究の概観

第２章　研究Ⅰ　適応のよい ASD の大学生・大学院生のレジリエンスに関するインタビュー調査（質的研究）
第１節　問題の所在と目的
第２節　方法
第３節　結果
第４節　考察

第３章　研究Ⅰにおける質問紙調査の分析
第１節　問題の所在と目的
第２節　方法
第３節　結果
第４節　考察

第４章　研究Ⅱ　適応のよい ASD の大学生のレジリエンスと学生相談室における支援（事例研究）
第１節　問題の所在と目的
第２節　方法
第３節　事例の概要
第４節　事例の経過
第５節　考察

第５章　総合考察
第１節　目的
第２節　総合考察
第３節　本研究における課題と今後の展望

〔３〕論文の概要

第 1 章第 1 節では、本研究に関する問題の所在と研究の目的が述べられ、本論文全体の構成について概観されている。第 2 節では、ASD の概要とその研究の変遷についてまとめられている。ASD は、現在の米国の診断基準である DSM-5（Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorder, Fifth Edition）では、「社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥」「行動、興味、または活動の限定された反復的な様式」などの特徴を持つ発達障害であるとされ、その程度にはスペクトラム状の広がりがあるとされているが（American Psychiatric Association, 2013）、現在に至るまで、1943 年の Kanner による最初の発表および翌年の Asperger の発表から、その主な特徴および原因についての考えは大きく変動した歴史があることの概観が行われ、ASD 者に特有の生きづらさについても記述されている。第 3 節では、レジリエンスに関する研究文献が概観されている。ASD を有しながらも適応のよい者の特徴を調べる上で、高リスク環境要因の経験に対する相対的な抵抗力、あるいはストレスや逆境の克服を意味するレジリエンスの概念（Rutter, 1985）に注目し、レジリエンスの定義として、ストレス源であるストレッサーの発生を予防することから、ストレスの影響を受けてメンタルヘルス上の反応が生じてもそこから回復する効果までを幅広く視野に入れる畠山・丹羽（2016）の考えが採用されている。そして第 4 節では、ASD 者および ASD 傾向のある思春期・青年期の若者のレジリエンスに関する研究文献が概観され、レジリエンス作用をもつ要因として、肯定的自己認知、愛着スタイル、ソーシャルスキル、自分で行う対処行動であるコーピング、他者からの支援であるソーシャルサポートなどが挙げられていることが示されたが、ASD 者および ASD 傾向が高い者はこれらが低いことが示されていることが確認されている。この点から、ASD 者が持ち難いレジリエンスをどのように手に入れるのかという、その獲得プロセスを明らかにする必要性が指摘されている。

第 2 章では、適応のよい ASD の大学生・大学院生のレジリエンスに関する面接調査について記されている。適応のよい ASD の大学生・大学院生が福祉施設の代表者などの紹介から探し出され、Zoom を用いた半構造化面接調査が実施され、11 名の面接結果が示され、その考察が行われている。この研究での適応のよい大学生・大学院生とは、18 歳以上 29 歳以下の者であり、ASD の診断を受けたことがあり、知的な遅れがなく、第 3 者から見て、周囲とのトラブルを起こさず、精神的な不安定さがないものとされている。面接調査の結果を修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（木下, 1999）を用いて分析した主要な結果は以下の通りである。1. 自身の ASD 特性について正確に認識し、この特性に伴う、対人関係の困難や感覚過敏や鈍麻などの短所を補うためのコーピングを用いている。2. 逆にこの特性がもつ、好きなことに没頭する傾向などの長所を活かしたコーピングも用いている。3. ストレッサーが発生する前にそれが生じないようにする予防的なコーピングを用いている。4. さまざまなコーピングをもっており、1 つのコーピングが効果を発揮しないときは、別のコ

ーピングへと柔軟に切り替えている。5. ASD の診断および自分自身について否定的な捉え方をしていない。6. 母親を中心とし、ASD の当事者仲間も含めたさまざまなソーシャルサポート資源をもっている。7. ソーシャルサポートの形成は、誰とでも仲よくすることを目指すのではなく、自分に合う人、信頼できる人を選んで慎重に行っている。8. コーピングできないと判断したときは直ぐにソーシャルサポートを積極的に要請している。9. レジリエンスを獲得するプロセスについては、親、特に母親が我が子の他の子どもとは異なる特性に気づき、医療機関を受診して診断を受けることが出発点となっている。そこから母親が診断名を否定的にならないように子どもに伝えたり、子どもの支援に必要な情報を獲得し、さまざまな支援機関に子どもをつなげたりしている。そのプロセスで、子どもは自分の ASD 特性と有効なコーピングの方法に関する多くの知識と、さまざまなソーシャルサポートを獲得している。

第 3 章では、面接調査の研究協力者に実施した、精神的健康度（中川・大坊, 2013)、ASD 傾向（Kurita, Koyama, & Osada, 2005)、愛着スタイル（中尾・加藤, 2004)、ストレッサー（嶋, 2004）に関する質問紙調査の分析が行われている。分析については、サンプルが少なく統計解析が行えないため、平均値に関して、男女それぞれの先行研究およびカットオフ値との比較、および男女間の比較が行われている。その結果については、適応のよい ASD 者の精神的健康度はカットオフ値よりも低い、すなわち良い者がほとんどであり、ASD 傾向はばらつきが多いもの平均値はカットオフ値周辺にあり、否定的な愛着スタイルは低い傾向が示されたが、精神的健康度とストレッサーについては女性の方が男性よりも悪い傾向があることが示されている。また、男女ともに身体的ストレッサーが高い傾向が示されたことについては、ASD 特性である感覚過敏と睡眠障害などによる身体不調や疲労が影響していることが考察されている。

第 4 章では、学生相談研究（2010 年、30 巻、3 号）に掲載されている、萩原氏自身が学生相談室で支援した ASD の大学生の事例を取り上げ、面接調査の結果と照らし合わせて検討が行われており、面接調査の結果との重なりが多いことが確認されている。本事例における ASD の大学生が、家庭教育や特別支援教育の中で、多くのソーシャルサポートに支えられながら培ってきた自己認識とコーピングが、大学の適応と精神的な安定の基盤になったであろうことが示されている。また、大学側の支援として、出身校からの引継ぎと母親からの情報もとにして有効な対応方法を入学前から把握し、それに基づいたサポート体制を準備することの重要性が提案されている。

第 5 章では、第 1 章から第 4 章を通じての総合的な考察が行われており、また本研究の課題と今後の展望が述べられている。

〔４〕論文の総合的評価

本論文は総合的に見て、以下のように評価することができる。

第１に、ASD の診断を受けた人たちに調査を実施したことである。日本の ASD 研究のほと

んどが、一般の大学生などを対象とし、ASD 傾向を測定する質問紙を用いて、その傾向が高い群と低い群とを比較するものである。そのような調査から得られた結果は、診断のある ASD 者にどれほど当てはまるのかという限界があるものであった。また海外には ASD の診断を受けた者についての研究が多く存在するが、日本国内の状況と文化とは大きく異なるため、その結果がそのまま日本の ASD 者に当てはまるとは限らない。その点で本論文は、日本の、ASD の診断のある者に適用できる知見を提供することから、貴重な研究であると評価できる。

第２に、ASD の診断を受けた者のなかにも、適応のよい大学生・大学院生が存在することに注目し、そのような者たちを探し出し、面接調査を実現させたことである。そして、ASD 者は自身の適応状況に関する判断が難しい傾向があるため、適応に関しての判断を ASD 者自身ではなく、第三者に行わせる手続きがとられている。さらに、面接調査において、その話す内容や話し方からその適応状況を吟味すること、特に、あらかじめ調査した精神的健康度の尺度においてその程度が悪い者については、その状態がストレスによる一時的なものか否かを確かめることも行っている。このように、適応のよさに関する判断を慎重に行う手続きをとったことは、本論文の研究結果をより妥当性の高いものにしていると言えるだろう。また、こうした手続きをとることで、ASD の診断を受けていながらも適応のよい者が存在することを示したことは、それ自体が ASD 者自身およびその家族や支援する人たちなどにとって希望を与えることであり、本論文を高く評価できる点である。

第３に、ASD の診断を受けながらも適応のよい者は、先行研究からは ASD 者には少ないとされている、自分の特性についての正確な認知、肯定的な自己認知、柔軟に切り替えることのできる多様なコーピング、豊富なソーシャルサポートなどを保持していることを示したことである。これらのレジリエンス要因をもつことが、ストレッサーが生じるのを防ぐこと、ストレスッサーが悪化するのを防ぐこと、落ち込んだ気持ちを落ち着かせることなどを可能にし、ASD 者の適応を維持・増進していることを示したことは、これまでほとんど研究されてこなかった領域であり、本論文の意義として高く評価できる。そして、これら有効なレジリエンス要因として取り上げられたものが、ASD 特性自体を変えるものではなく、かつ後天的に獲得できるものであることであるため、ASD 者にとって、それを取り入れやすい可能性があることである。このことは、本論文の成果と内容が ASD 者の支援に貢献できる重要な点である。

第４に、適応のよい ASD 者がレジリエンス要因を獲得してきたプロセスを示したことである。母親が子どもを医療につなげることから始まる、このプロセスに関する知見は、ASD 児の適応を高めるための、幼少期からの生育環境の在り方や支援の方法に関する豊富な情報を含んでいる。これもほとんど研究されていない領域であり、本論文の成果と内容が ASD 児の支援に寄与できることでもあり、高く評価できる点である。

第５に、萩原氏のもつ心理臨床領域での豊富な経験、それに裏づけられた高度な知識とスキルは、本論文の中核をなす面接調査において研究協力者から率直な語りを引き出すこと

を実現しており、適応の程度を含めた、語られた内容の判断においてもその正確さを高めていると考えられ、本論文の内容を表面的でない、意義のあるものにしているだろう。

本論文の課題としては、次のことを指摘しておきたい。

第１に、本論文の研究テーマについては先行研究がほとんどないため、本論文は 11 名という少ない調査協力者に面接調査を実施し、仮説生成をすることで取り組まれている。したがって、得られた結果ついては質問紙調査などを通して実証することと、支援の実践においてその有効性を確かめることが必要である。とくに本論文の調査協力者が大学生・大学院生という知的に高い者達であるため、得られた知見が ASD 者全体に有効であるのかを確かめることも必要であろう。

第２に、本論文では ASD 者の愛着形成に関して明確な結論を出すことができなかった。本論文の ASD 者は母親との関係がよく、それを基盤にしてか多くの他者に援助を受ける関係を築いている。これは、母親との安定した愛着形成を基盤にして行われているようにも推測される。しかし本論文の ASD 者は対人関係が余り得意ではなく、対人関係の形成においてはきわめて慎重な傾向がある。また質問紙を用いて測定した愛着に関しても、愛着とは異なるものを測定していた可能性がある。ASD 者の愛着形成の有無は ASD 者の適応に関する重要な論点の１つであるため、これを精査する手続きを備えた研究を行う必要であろう。

第３に、本論文で示された、女性が男性に比べて適応が悪い傾向に関しては、その議論に踏み込むのに必要なデータを得られていないため、十分に検討することができていない。この ASD 者の性差については海外の文献でも指摘されるようになっていることでもあり、重要なテーマである。本論文では、この性差の要因に関して、女性が ASD 特性を隠す傾向にあり、そのため対人関係などに関するストレッサーの発生を回避するのをためらいがちであることが示唆され、コミュニケーションに関するジェンダー・ギャップが関連する可能性が推測されるが、この点については精密な調査が必要だろう。

〔５〕論文審査結果

以上により、論文審査委員会は、萩原豪人氏提出の論文「自閉スペクトラム症の大学生・大学院生のレジリエンスに関する研究」について、博士（学術）の学位が授与されるのに十分な資格を有するものとの結論に達した。